

## 平山蘆江年譜稿（その一）

## 平山城児

### 前書

今日までに公表された平山蘆江の年譜は、『大衆文学大系』第五卷（昭46・8、講談社）に掲載された清原康正編のものが唯一である。その後私は、いくらかでも事実を明らかにしようと思い、「蘆江伝の訂正と補足―書簡・日記の紹介を兼ねて―」（『国文学踏査』平18・3）という論文を発表した。その後も少しずつ資料を収集し、いつそ右の年譜の誤まりを訂正し、さらに新たな資料を補足しうる段階に達したので、それらを再構成して新しい蘆江の年譜を発表しようと思う。

それでもなお、資料追究の不備な点は多々残されていることは本人がよく自覚するところであるが、何分にも老齢であるため、こうした作業を一応満足に行いうる期間は、私にはそれほど多くは残されていないと自覚している。それで、この時点で思い切って発表することにした。「年譜稿」と記したのはそうした意味からである。

今回の原稿中に「年譜」とただ記したものは、右に述べた『大衆文学大系』所載のものを指す。また、「孫たちへ」と記したものは、蘆江

が生前、昭和二十三年七月に三人の孫のために毛筆で記した自伝風の冊子で、いまだ活字にはなっていない資料である。年譜中の蘆江の年齢は数え齢による。

\*

蘆江の父田中正二（俗称壮兵衛）は、旧薩摩藩長崎薩摩屋敷の船御用さつまやの七代目にあたる。さつまやは長崎に入港して行く唐人船の修理と在港中の諸用一切を幕府の命令で引き受けていた半官半民の家柄で、旧幕時代は一町四方の構えをもつほどの賑いであり、屋敷内に造船所を持ち、唐人船を何隻も入渠できる設備もあつたが、維新の変革で瓦解し、正二の代には完全に没落してしまつた。

正二は再起をはかるため、妻けい、娘むらを長崎に残し、単身上京した。当時、大蔵事務官であつた松方正義を頼つて来たのである。松方は、かつて薩摩藩から長崎へ出張を命ぜられた時に田中家の世話になつたという縁があつた。のちには大蔵大臣、さら

には総理大臣にもなった松方との交渉がうまくいかなかったのか、長崎に残しておいた妻子を引き取ろうとしてもどつたところ、妻けいは娘を連れて柳谷という船具を商う店の主人と再婚していた。

「孫たちへ」には「柳谷」とあるが、過去帳には「森田」とある。

正二は妻子には見捨てられ、おそらくは東京での交渉もはかばかしくなかったためか、一切合財を投げ捨て、無一文になって漂泊、明治十一年（一八七八）頃、神戸湊川畔西国街道筋兵庫宿脇本陣虎屋に転がりこんだ。その後正二は虎屋の主人の姪しなとねんごろになり、二人の間に、とせ、てつ、壮太郎、すがという四人の子供が生れた。

明治十五年（一八八二）

一歳

右のような事情があつて、壮太郎（蘆江）は十一月十五日に、神戸湊川神社の近くで生まれた。

明治二十年（一八八七）

六歳

正二は、虎屋の貸長屋の管理をしたり、神戸の芝居小屋大黒屋の帳元をつとめたりというわびしい生活を送っているうちに胃癌になり、九月四日に五十歳でなくなつた。大往生であつた。

正二は遺言で、女の子はしなが育てるように、壮太郎は東京の松方正義か長崎の平山浅吉に電報を打つて、いずれかに引き取つてもらえと言つた。「孫たちへ」によると、「私が死んだら、長崎へ電報を打つてくれ、電報を見たらすぐに平山といふ人が来てくれる筈だから其人に壮太郎を渡してもらひたい」とあつて、松方云々の部分

はない。平山家は田中家とは数代にわたつて主従関係にあつた間柄だつたので、平山浅吉としては、御主人様の長男を引き取つたということになる。

平山家は当時長崎本籠町にあつた立派な酒屋であつた。明治二十年当時、浅吉よね夫婦はどちらも二十五歳で、二人の間には子がかつた。壮太郎は十月二十日に平山家に入籍した。当時日本で初めての幼稚園が出来、当時はお金持しか子供を通わせなかつたので、幼稚園に通う壮太郎を「酒屋の坊つちやま」とだれもが言つた。十歳までは甘やかされたが、十一歳以降は酒屋の小僧として厳しくしつけられた。「朝は五時に起き、学校へゆくまでの二三時間に広いお店の掃除、ランプ掃除、おつかいなど沢山して学校からかへるとお得意先の徳利ひろひ、そしてお店の掃除、その外の時間は店にすわつて酒買ひに来る人たちへ呑み口をひねつて、酒売りをし、夜は十一時に店をしまふまで、お膝をくづすこともゆるされなかつた」（「孫たちへ」）。

明治二十七年（一八九四）

十三歳

七月二十五日、豊島沖の海戦によつて日清戦争が始まつた。平山酒店では、その頃佐世保に支店を作つた。支店は、佐世保軍港やそこから戦争に出港する軍艦へ日用品を納入したり、両替する仕事も引き受けていた。両替部には常に大量の小銭を用意しておかねばならないので、壮太郎はズツクの袋をかついで長崎中を隅から隅まで歩いて銅貨や銀貨を集めてまわつた。こうした店の仕事を手伝いな

がらの壮太郎の学業成績はいつも上位を占めていたので、浅吉もか  
げでは壮太郎を賞めていた。

明治二十八年（一八九五）

十四歳

その頃の小学校は尋常科四年、高等科四年となっており、高等科  
二年を終えると中等学校への入学試験の資格が認められていた。と  
ころが、うかうかしているうちに、壮太郎は高等科四年を卒業し、  
中等学校への入学試験を受けなければならないと気づいた時には、  
一般の生徒より二年も年齢が進んでいた。自分は文学者になりたい、  
文学を一生の仕事にしたいと壮太郎が決心したのは十四歳の秋の頃  
で、十五歳の春まで考えつめた揚句思い切つて父親にうちあげたが、  
浅吉が賛成するはずがなかった。

父親の命令は絶対であつたので、止むを得ず長崎市立商業学校へ  
入学、いやいやながらの三年間の通学が始まつた。それ以前から壮  
太郎は、「店の仕事のいそがしい中で、本ばかり読んでみた、近所の  
人に借りて来て八犬伝も読んだ、太閤記も読んだ、小学校一年生か  
ら英語と漢文の特別稽古も受けていたので十八史略も読んだ、唐宋  
八家文も読んだ、テニソンも、アラビヤナイトも英文で読みふけ  
つた」（「孫たちへ」とある）。

明治二十八年か二十九年頃の話として、別の蘆江の回想がある。  
以下それを要約すると、その頃、石橋忍月を中心に長崎に文学青年  
会ができ、鎌田秋圃、野村汀舟らが世話人となり、浄安寺という寺  
の二階を借りて文学の集まりをした。十人前後の人間が俳句や短歌

を作つたりした。それらは『長崎新報』に発表した。また、『半秋』  
という雑誌を作り、それを送るなどして與謝野鉄幹に連絡し、彼ら  
は新詩社長崎支部となつた。しかし、発行費用がかさみ、会員は次  
第に減り、最後には鎌田、野村、南木萍水、それに蘆江の四人ほど  
になつた。さらに、野村、蘆江の二人は上京してしまつた（『住吉だ  
より』昭27・6）。また、岡田源吉の文章によると、『半秋』第一号  
に載せた蘆江の作品の題名は「こしき岩の一夜」であり、のちの蘆  
江の作品「唐人船」に登場する楠萍水という人物のモデルは南木芳  
太郎（萍水）だということである。

明治三十年（一八九七）

十六歳

その頃から、平山酒店では、日本酒、洋酒の販売のほかにラムネ  
製造という仕事もふえていて、壮太郎の忙しさはそれ以前以上であ  
つた。しかし、その暇を見つけては文学雑誌発行の手伝いなどをし  
ていたもので、そのことが知れると、浅吉は読書を止めると怒つた。  
それからの丸二年間、壮太郎は全く日本語の文字を読まずに暮した。  
もつとも、「外国語なら読んでもよろしい」と云はれたのを幸ひ、英文  
の本を次々と買ひ込んで片はしから読んだ、露西亞語の稽古に通  
つたのもその頃のことである。折よくも、本籠町に西洋雑貨の店が  
出来そこに洋書部が出来て、モウパッサン全集の英訳本などをはじ  
め新刊の英書さへ輸入されたので、一方ならず幸ひされた」（「孫た  
ちへ」とある）。

明治三十三年（一九〇〇）

十九歳

この年の「初秋のある日」、浅吉の了解のもと、壮太郎は実父正二が長崎に残した先妻けいとその娘むらに初めて会った。そこは、「本下町の森田といふ船具店」で、平山酒店と同程度の大きな商店であった。「店先には船の錨の綱や、羅針盤や、船灯、潜水具などが沢山置いてあった」（「孫たちへ」）。

おむらは、壮太郎を前にして、これまでのいきさつを語り、みなし児同前になった壮太郎を吾が子のように育ててくれた浅吉の気持ちに感謝しなくてはいけないとさとした。以前は長崎本石灰町（むしつぐいまち）のすし屋の娘で、あまりに美しいので田中正二が妻にしたのだというおけいは、「三枚もふとんをかきねた上へおきなほつて壮太郎をぢろりと見て、何も云はなかつた」（「孫たちへ」）。

おむらの話を聞いたため、壮太郎は今までになく悩み始めた。田中正二が「以前主人であつたといふだけのこと」で、壮太郎を引きとり、「十三年（マ）もの間、我子のやうに育てて下さつた浅吉の言葉にそむひて壮太郎はわがママをいひつづけて来たのだ」（「孫たちへ」）。その思いが昂じて、壮太郎は自殺しようと思う。最初は長崎竹の久保という所へ行つて水に飛び込んで死のうと思つた。「次には養母およねのたんすのひきだしにあつた短刀で切腹しやうと思ひ、三度目には熊本県の阿蘇山の噴火口へとび込まうと思つた」（「孫たちへ」）。しかし、死ぬのは卑怯なことだ、養父に反抗しても自分の目的を達して身を立てることが結局は孝行することになるのだと考え、浅吉に対決した。浅吉もこの壮太郎の強情にはとうとう負けて、それ

ほど思いつめるなら文学への道へ進め、しかし途中でへばつても助けないぞといちおうは納得してくれた。学校を出るまでの下宿料と学費だけは出してやると浅吉は言つた。

明治三十四年（一九〇一）

二十歳

調べてみると、この年の十一号から十八号までの『明星』に、以下のように平山蘆江の署名で短歌が採録されていた。合わせて二十八首である。二月、一首。五月、二首。七月、三首。八月、三首。九月、五首。十月、五首。十一月、四首。十二月、五首。

「年譜」明治四十年の条に、「これよりもなく『明星』への投稿を介して、与謝野鉄幹、晶子夫妻に私淑」とあるが、明治三十四年刊の『明星』八冊に蘆江の短歌が採録されているのであるから、「年譜」の「明治四十年」という記述は誤りである。

「平山君ですか、丁度好いところへ来た、けふは明星の校正が出ますから、二人とも手伝つてくれたまへ」／与謝野鉄幹先生は歯ぎれの好い澄んだ声で挨拶の済むのを待たず、腰を浮かした。初対面あつかいをしないのが無上にうれしかつた。すぐに番町の新詩社から飯田町のたしか成功社といふ印刷所へ肩をならべてあるく間も胸のとどろく思ひだつた。／「先月号に出した君のうたはよかつたよ。多度津いでしその夜はむかし浪の月、この下り舟足らぬ人ありといふのだつけね、好い歌だ、土佐日記を読むやうで実に情味のあるうただ」（蘆江「むかし話」）（三）『住吉だより』第三号、昭27・6。』

鉄幹が空で唱えてみせた蘆江の短歌は、『明星』16号（明34・10）

にそのとおり掲載されているので、この情景は、少なくとも明治三十四年十月以降のある日のことになる。まだ海のものとも山のものとも知れぬ、十九歳の青年の作った歌をすらすらと暗誦することによって、その弟子の心をぐつとつかんでしまう鉄幹の面目躍如たるものがある。

右の「むかし話」には、さらに多くの同僚や先輩たちの動静が語られているが、それらはここでは省略することにして、最後に登場する晶子の場面のみを引用しておく。

「到頭、鳳晶子のあらはれる日が来た。腰をどつしり落とし、わらひを含んだ顔を傾け気味にくづれかかるやうな姿勢で、肩までもかぶさるやうな乱れ髪で殆んど聞きとれないほどの声で親しげにものをいひかける人だつた」(同前)。

この印象も、晶子の姿かたちが生々にとらえられていて見事である。このまま短歌をつづけていたならば、蘆江は明星派の歌人として世に知られるようになったかもしれないが、明星派との線はそこでぶつ切り切れて、その後蘆江は短歌という形式では歌を作らなくなる。鉄幹がすらすらと暗誦してみせた「多度津―」以外の蘆江の短歌を二首ばかり引用しておく。

み空ただ青く青きに酒は冷えぬ牡丹の真昼われ詛のろはしき

(七月、三首のうち)

むちをあげてまたその空をさしますな西は日の入るさびしの方よ

(九月、五首のうち)

いかにも明星調の短歌である。

蘆江の没後、ある雑誌に本山荻舟が書いていた追悼文の中で、世上の都々逸の詩型を用いて、「むしろやさしい情感にうったえて、少くとも伴奏の三味線に乗りながら、在来の卑俗から脱却しようというのが」蘆江のねらいであったのだろうと推測し、そうした意味での二十六字の詩を「街歌」と名づけて蘆江が普及させていったのだが、「七七七五」の定型の外に、初期の間好んでつけた「前五」を加えると、併せて三十一字になる。新詩社時代への郷愁ではないかと、いつもほほえましく思ったことである」と述べている。蘆江の登場よりも二、三号早い『明星』の号に、荻舟の短歌が採録されているように、荻舟も初期には新詩社で短歌を作っていたのである。

\*

三月十四日長崎を出発、壮太郎は東京へ向かった。長崎―小倉間、小倉―徳山間は船により、徳山からは列車で終点汐留駅まで約四十三、四時間の旅であった(蘆江「野方随筆」)。落ち着き先は下谷車坂町五十一番地の大石久橘の家だった。大石は通信省電信技手で、長崎近海底電線を架設するため、六、七年間平山家の貸家に住んでいたという縁があったので選ばれたようである。

この年、壮太郎は東京府立第四中学校(現、都立戸山高校)の三年生となった。

明治三十三年から三十五年へかけての東京在住当時の行動について、以下のような記述が蘆江本人によって記されていた。ただ、そ

れらが何年何月の事柄であるかは、今日になつては確かめようがない。

○上野三宜亭で催されていた文学雑誌『文庫』の読者大学に出席（『住吉だより』昭27・12）。

○木曜日ごとに新詩社へ通い、雑用を手伝う。寄席にもしばしば通う（同前）。

○野村汀舟に引きあわされて知つた水谷武正の父は水谷六郎といい、長崎三菱造船所の所長で、殿様のような立派な家に住み、蔵書が豊富だった。その蔵書を借りて読んだ。のちに水谷八重子を育て女優にしたのがこの武正である（『住吉だより』昭27・8）。

○壮太郎の二つ年上の、養母の末弟である宮川鹿之助も東京市ヶ谷の素人下宿にいて外国語学校へ通つていた。壮太郎が親の信用を失つたので、浅吉は鹿之助に金を送るから、そこから十二円五十銭をお前の分として受け取れと言つて送金してきた。ところが、鹿之助は送金の大部分をひとり占めにした上、壮太郎の時計や毛布もまき上げ、牛込新小川町の下宿へ自分と一緒に住めと命じた（『住吉だより』昭27・12）。

○鹿之助は小田原の道了尊へ連れて行つてやると言つて、壮太郎と二人で小田原まで徒歩で行く。途中、足柄下郡の酒造家へ寄つてたらふく酒を飲み、道了尊でも豪華な客膳が出たが、それらはすべて壮太郎の友人の沢地良吉か、沢地家のおごりであつた（『住吉だより』昭28・3）。

\*

「年譜」明治三十九年の条に、「短歌が機縁となつて野梅の号をもつ酒井医師と知り合い、その文才を認められ『満州日報』に推挙され、蘆汀の号で寄稿。初めて三十円の原稿料を受取り驚喜した。汀を江と誤植されたのを機に蘆江と改めた」とある。どのような資料をもとに「年譜」にそう書かれたか私は知らないが、これまで述べてきたように、明治三十四年にはすでに「蘆江」の号で「明星」に投稿しているのであるから、右の「年譜」の記述は改めなければならない。

この号に関しては、壮太郎自身が「孫たちへ」の中で次のように述べている。東京へ出て来てから『文芸倶楽部』に投稿して三等に入選したという事実を述べたあと、「その前から、壮太郎は蘆江といふ名を考へて用ひてゐた、養父にさからふことが申しわけなく、自殺を決心して長崎竹の久保といふところへ行つた時、そこには清い水のひとつに蘆が一杯そよいで居り、だんく／＼暮れかかる夕日に美しく水が光つてゐたのが忘れられず、その風景に因んで蘆江といふ名をつけたのだつた」というのである。これは、前にも述べたように、明治三十三年頃のことらしいので、『明星』投稿以前のことになり、年代的にはこうした因縁の方がつじつまがあつてゐる。

明治三十六年（一九〇三）

二十二歳

一月発行の『文芸倶楽部』第九卷第一号の巻末に「懸賞短篇小説募集の檄」という広告が初めて出た。「規定 二十行二十字詰〇〇〇

二十枚以下／賞金 第一等 金貳拾円／第二等 金拾五円／第三等 金拾円」というものである。四百字詰原稿用紙で二十枚以下という枚数規定はかなり厳しいが、一等賞金の二十円というのは高額である。第一回（明36・3）から当選者を見てゆくと、第一回にも第二回にも蘆江の名はなくて、第三回（明36・5）の第三等に蘆江の作品「三つ巴」が当選していた。実体はないのに妻が近所の男と情交したと嫉妬して騒ぎを起すという話で、他愛はないけれども江戸前のセリフまわしが鮮やかに駆使されていた。

ともかくも、『明星』の短歌を除けば、蘆江の作品の中では初めて活字になったものと言える。面白いことに、終生蘆江に暖かい視線を注いでくれた本山荻舟もこの懸賞に応募し、第十一回（明37・3）には第三等、第十五回（明37・5）には第一等になっている事実もあつた。

蘆江のペンネーも、この時点ですでに用いているのだから、「年譜」の記述は誤まりとしてよい。

\*

この春、早稲田大学が出来た。養父は、大学の試験を受けてみたらどうかと言ってきた。壮太郎は、これまで四年間も無駄に学業をつづけて来た上、この先さらに学業を継続したとしても何の役に立つだろうか、これからは新聞社か雑誌社に勤めて働きながら文学への道を進みたいと養父に返答した。養父は金十五円の金と一緒に手紙を寄こし、若いのに生意気なことを言うお前には、今後学費を送

るつもりはない、この金は縁切り金だと記してあつた（「孫たちへ」）。

宮川鹿之助は以上のやりとりを知った上、徴兵検査もあることだし、この際はいったん長崎へ帰って養父と相談するのが子としての道だと説得した。壮太郎も叔父の意見には従う気になったが、例の十五円は叔父と二人で使つてしまい、ほとんど残つていなかった。叔父はもう一度旅費としてお金を送つてもらえと言つたが、壮太郎にも意地があつた（同前）。

五月二十一日に長崎に向かつて徒歩で出発することになるわけだが、さきの『文芸倶楽部』の懸賞当選の記事の中に、当時の蘆江の住所が記してあり、次のようであつた。

東京神田区猿樂町一丁目五番地篠沢方

この下宿を朝五時半に出発したわけである。同宿の水谷武正が心配して品川八ツ山まで送つてくれた。下宿にあつたすべての品物を売り払つたら十八円ナニガシになった。十五円を下宿に払い、菅笠一蓋、着莫塵一枚、日記帳、写真帳、色鉛筆、着がえ用のシャツとズボン下、足袋、脚絆、手荷物入れの袋用のメリンスを買つた残りが二円六銭。これが所持金のすべてであつた。この日は建長寺で友人の友人に会う（『旅と伝説』昭12・1）。

宇都谷峠旧道は昼なお暗い道だった。大井川は針金の渡しを渡る。渡舟賃二銭（『旅と伝説』昭12・3）。

天龍川の鉄橋を渡り、舞坂から浜名湖を過ぎる。そのあたりで道連れになった二十四、五歳の男が、自分は児島三郎といい、親は田

舎廻りの新派で児島文雄という。君が役者になりたいなら紹介しようと言う。まんざら役者になりたくないわけでもなかった壮太郎は、ついついその話のつて、歩きながらセリフの稽古などをする。

名古屋に着くと、空き地にわびしい芝居小屋があった。座長に話してくるからちよつと待てと言つて、児島は幕の中へ消えた。いつまで待つても現われないので、壮太郎が中へはいつて芝居の者に訊ねると、そんな男は知らないと言う。宿へもどると、シャツ、ズボン下、羽織と、その時所持していた有り金六、七十銭のすべてが盗まれていた。護摩しんまの灰の籠抜け詐欺にあつたのである(同、昭12・5、7)。

名古屋から西へ行くには、揖斐いび、木曾、長良の三川を渡らなければならぬ。渡し賃はそれぞれ二銭である。現金がないので、持っていたハガキ十枚を、無理言つて巡査に買い取つてもらい十五銭の現金を作る。三川をやつと渡つて四日市の安宿にとまる。宿賃は八錢(同、12・7)。

水口のあたりで豪雨に会い、食事も全くとつていないので、たまりかねてかねて警察署に飛び込んで救いを求める。すると、暖かいうどんが二杯も出て、さらに五十銭銀貨も恵まれる。その時の巡査の氏名を記憶しそこなつたために、壮太郎は一人前になつた後も礼を言うことができません、そのまま三十四年が経過する。昭和十一年にその巡査が園川真道という人だつたことが判明し、再会を果たすことができた(同)。\*この「年譜稿」の昭和十一年十一月四日の条参

照。

伏見稲荷の宮司の息子氷室昭長が府立四中時代の同級生であつた縁にすがつて訪ねると、歓待される。久しぶりに湯に入り、絹の蒲団で休む。淀から三十石船で大阪まで下り、天神橋に着く。そのあと、長崎の平山酒店と縁のある堺の店へ漸くたどり着いた(同、昭12・10)。

堺市の柴長という店は、平山酒店で売る酒の本舗であつた(「異母姉むらの縁故者の住む堺」と「年譜」にはある)。そこから先も長崎までも徒歩で行くつもりだったが、旅費がないので養父に手紙を書き、二円でも三円でも恵んで欲しいと頼んだ。しかし、すでに長崎からは電報が届いていて、堺から汽車に乗せられて壮太郎は長崎に帰りついた(「孫たちへ」)。

「徴兵検査の結果は丙種合格。東京に戻れぬまま平山酒店新設のラムネ製造部の責任を負わされ家業に従事するが、養父との折りあひますます悪化。渡満を企てたが果せず踊りの稽古に耽溺。これが養父の知るところとなり遂に勘当となり、異母姉むらの口添えで滿州義勇軍にいた養母よねの弟宮川鹿之助を頼つて營口に渡つた。(以下略)」と、「年譜」の明治三十五年の条に記してあるが、この記述の「これが養父の知るところ」以下は明治三十七、八年の事実である。

「孫たちへ」によつてこの間の記述をつづける。長崎へ帰つたあと、「養父は烈火の如く怒り、壮太郎はそのままとの通り平山酒店



の店番をさせられ養父ものをいはず、壮太郎も無言のまま三十七年は暮れ、三十七年には間もなく日露戦争がはじまつたので、店がいそがしくなり、三十七年一杯を酒屋及びラムネやで威勢よくはたらいた。

従つて、このあたりの「孫たちへ」の記述は、明治三十六年から三十七年へとまたがつていることになる。

「孫たちへ」の引用をつづける。「併し、父と子の沈黙は三十七年十一月に破裂した。自立して文学生活に入るまでは再び顔を見ないといふ申渡して横浜までの船賃七円五十銭を養父にもらつて壮太郎は再び東京へ引かへしたが、自立の道はなかくむづかしかつた、米飯を食べぬこと十五日間、一食もしくば二食又は隔日食でくらすこと約一ヶ月といふ風な惨憺たる生活の後、姉おむらによびかへされて長崎へ戻り、おむらの良人が満洲でラムネ屋をはじめたのに店員をつとめるために明治三十八年五月末渡満することになった、それは丁度日本海々戦直後で、渡満の途中、船中で日露砲撃の爆音をかすかに聞いたくらゐであつた。いわゆる日本海海戦は、「五月二八日午前一〇時三〇分、優勢な日本艦隊に包囲されたロシア残存艦隊は降伏した」（大江志乃夫『バルチック艦隊』中公新書）とあるように、二十八日午前中には実質的な戦闘は終つていた。壮太郎が船中で聞いたという「爆音」はいかなる爆音であつたのか。これほどの世紀の海戦の硝煙がまだ漂っている対馬海峡を、民間人を載せた船舶が航行できたのであろうか。

「孫たちへ」の引用をつづける。「おむらの良人森田栄吉のラムネやは当時の清国營口で遼河の河口にある都市であつた、六月一日上陸、約一ヶ月半店務に従事してゐる中、森田ラムネ店は廃業したので壮太郎は又しても失業して了つた。偶々叔父宮川鹿之助が同じ營口で商公司をひらいてゐたので、すぐに社員の一に加へられたが、この公司も亦五ヶ月で廃業になつた、五ヶ月目にはじめて知つたことだが、宮川の商公司是表に遼河運輸公司といふ看板はかけて居るものの実は馬賊をやつて居る会社であつたのだ、尤も馬賊とはいへ匪賊ではない、日本軍のために糧食を調達し又は側面的に露西亞軍を混乱させる仕事をするのが目的であつた、そして壮太郎は、自分の仕事は何であるかを知らぬままに是等の任務をやりとげてゐたのだ、五ヶ月の間、ある時は死地にとび込み、ある時は敵に羅致された日本人を救ひ出しにゆき、ある時は蒙古（「国」の字が抜けている―平山）境へ物資の購入にとび込んだりしたのだつた。

戦争は其年の八月に終つてゐるが、かうした仕事は引つづき十月すぎまでつづいたのだつた、明治三十九年の一月、商公司是解散し、宮川等は内地へ引あげたので又しても壮太郎は營口で孤立無援のまま居残らねばならなかつた、丁度その時伊勢香取の人落合ゆきが、矢張職を失なつてゐたので助けあつて兎に角もその日その日をどうにかくらすことになつた。

「年譜」には、明治三十九年の事実として、「この間、宮川鹿之助が病没し、（傍点・平山）彼の情人であつた落合ゆきと結ばれた」と

あるが、この記述の根拠を私はいまだに知らない。

明治三十八（一九〇五）～三十九年（一九〇六）二十四～二十五歳

蘆江と結婚したゆきは、その後蘆江にうとまれて事実上は別々に暮らすことになり、最終的には息子清郎きよらうの家で一生を終えることになるが、晩年のゆきが話すむかし話を、私（城児）が根気よく訊き正してまとめたものがある。その話は「訂正と補足」に「祖母ゆきの話」として発表してあるが、このあたりの記述に関係してくるの  
で、要約しつつ引用しておく。——最初は柴チ柴チ柴チへ行った。その旅館で帳場だけやるという約束だったのに、インチキな商売らしいのでそこを去り、「宮川（鹿之助）や山本などに誘われて營口へ行った」。「營口へ行ってからは、高橋という山口組の者がやっている旅館（鶴屋）を任された」。高橋という男はケチで、祖母とは気性が合わなかつたらしく、ついにはその旅館経営を乱脈にした上で別の所へ移った。「蘆江との結婚は、山本たちの世話で実現した。自分には前夫があり、子供も二人いるのだからと断ったが、蘆江の方は、あの人さえよければ自分は何も不足はないと言うので、まわりの者がわれわれにすすめて盃をかわさせたのである。その時、私は二十六歳、蘆江は二十五歳だった」。

「平山蘆江出世物語」（昭10・7・1『新聞之新聞』）によると、「公  
司を経営して友人が脅喝罪に問はれ吹雪の夜トロツコで逃がしてや  
つたり、税関手続所の書記に傭はれたり、絵看板屋を開業して失敗  
したり、馬賊と商取引のやうなことをやつたり、海賊の見張り（厳

密に云ふと支那の漁船が海賊除けのために日本人を傭ふそれである）  
になつたり、又支那便所の汲み取り人になつた」のはすべて事実で  
あるとのことである。

のちに、蘆江は『馬賊の旗』（昭14・2、岡倉書房）という作品を  
書いた。主人公は清国重利きんりにしげしという男である。その小説によると、清  
国氏は代々豊前中津の藩士の家で、重利の父重太郎は、筑前炭田三  
井の炭坑で働いていた人であると記され、重利自身は、「満洲国総務  
庁長秘書官」となって、満洲国皇帝のお供として来日するなど書  
かれていいる。一方、重利は、清風洋（のちに清鳳洋）と名乗って活  
躍した馬賊でもあった。

もちろんこの作品はフィクションであるから、どこまでが事実で  
あるかどうかは保証の限りではないが、太平洋戦争後のある日、鎌  
倉の「鎌倉ホテル」の一室に隠栖中の清国重利その人に、私も父に  
連れられて面会したことがある。当時、敗戦の痛手がまだ癒えない  
頃で、そもそも「鎌倉ホテル」などというリゾート専用のホテルを  
利用する客が存在しない時代であった。そうした時期にそのホテル  
に住居のようにして長期間滞在できたというのは、氏がしかるべき  
筋からの手厚い補助を受けていたとしか考えられない。経歴を考え  
ると、当然戦犯に指定されるような氏が、ひっそりと鎌倉に潜んで  
いたというのは不可解なことである。父と彼とがどのような会話を  
交したかは知らない。ただ、部屋のソファに腰かけていた氏の重厚  
な気配と、ほとんど物音のしない部屋と、その片隅の棚の上に無造

作に積まれてあつた高価な缶詰類の姿しか私は記憶していない。カニ缶、シヤケ缶の類いは当時はべらぼうに高く、庶民の手にははいらない贅沢品で、闇物資であつた。その時の氏は、まだ五十代後半位の精悍な男性であつた。蘆江と満洲のどこかで接触があつたからこそ、そうして蘆江の息子と孫に会つていたのであろう。戦争中のある日、氏が軍服姿でわが家に現れて、日本刀を仕込んだと思われる軍刀を持って立つていた姿も記憶している。

一方、岡田源吉の追憶によると、ゆきは西門街外で旅館を始めた。中国民家を借りてである。ゆきはしっかり者で世話好きだつたので、客はいつも満員だつたが経営としては失敗に終わった。そこでの蘆江の役割は、「番頭兼帳場兼ボーイ」であつた。その後、宮川鹿之助が佛(フツ)(普一平山)蘭店で税関長をしていたので、その手引きで、蘆江は遼河かどこかの税関の監視船に乗つていたこともあつたようである。

\*

「年譜」に、「短歌が機縁となつて野梅の号もつ酒井医師と知り合ひ、(以下略)」とあるが、このあたりの記述は事実と異なる点が多く、全面的に訂正しなければならない。それは「訂正と補足」にすでに詳しく記してあるが、以下に要点を記しておく。

蘆江が「たまたま鼻の先に傷を負ひ、酒井という医者にみてもらったところ、酒井は野梅という俳号をもつ文人でもあつたので、鼻を素材にして一句をひねつたらしい。それに対する蘆江の反応がま

んざら文学に縁のない素人とは思えないものであつたため、野梅も意外に思い、君の作つた「近作はないかね」と言つた。蘆江が「その頃作り放しにして置いた腰折少々ばかりを観賞(クワン)に供する」と野梅はそれを持ち去つた。すると、「この句が翌朝の満洲日報に掲載され来原と云ふ当時満日の編集長が人力で尋ねて来て、「君あれは相等(トウ)なものだよ。今度は是非小説を書き給へ、毎日スペースを二段づゝ提供しよう」と云ふ正に柵(サ)ぼたのやうな話」(「平山蘆江出世物語」、傍点・平山)という文章が残されているが、明治三十九年一月から明治四十年一月までの『満洲日報』のマイクロフィルムを調べてみたところ、同紙(明治39・8・11)に〈文苑〉というコラムがあつて、

かがなへてまだうら若さ(「き」の誤植—平山)我と思ひ甲斐なきものともた思ふかな

この一首をかしらに「蘆江」の署名のある五首の短歌が掲載されていた。一首には(宮口にて)とわざわざ注記のあるものもあつて、野梅に注目させたのはこれらの短歌であつたと思われるので、さきの記事に「この句」とあつたのは、「この歌」と訂正しなければならない。私が調査した約一年間分の紙面には、蘆江の小説は載つていなかった。

また、わが家に、『俳句帖 丁未正月以降 江生』と表記に記し、和紙に墨書して綴じた句帖が残されていた。「丁未」は明治四十年であるから、満洲在住当時の句帖である。蝋十句、鳴物十句、雪百句

のように、内容は題詠の句ばかりだが、全部で三二三句を数える。最初から最後まででいねいに朱が入れてあり、句によつては容赦なく添削が加えられているかと思うと、過褒と思えるほどの評語もちらほら見受けられる。『満洲日報』に「日報俳壇」というコラムがあつて、恒常的にその選者であつた酒井野梅に、蘆江が添削を乞うていたのであろう。

ぱつくりと開く仕掛あり臺ひまの口

桃さくや虫歯のいたむ午下りひるさが

短歌では鉄幹に注目させたほどの才能を示した蘆江だが、俳句は終生それほど上達はしなかつたようである。

「年譜」には、明治三十九年の条に、「満洲日報」社長代理の来原慶介の発案でハルビンに「東亜時報」が創刊され、編集長代理として創刊に携わるが、二号で廃刊」とある。このあたりの事実の検証はまだ行なっていない。

明治四十年（一九〇七）

二十六歳

「年譜」に、「都新聞」主筆田川大吉郎宛の来原慶介の紹介状を携え、落合ゆきとともに帰国。東京市ヶ谷谷町（現新宿区市谷谷町）に新世帯を構えた」とある。「訂正と補足」に引用した「祖母ゆきの話」には、「東京へ帰つてからは谷町に住んだ。初めは所帯道具もななく、お茶碗二つにお皿だけだつた。蘆江は満洲にいる頃から書いていたけれども、盛んに書くようになったのは二十九歳頃からだつた。旅順にいた蘆江の姉夫婦は、官庁の御用商人で、店ではラムネを売

つたりしていた。蘆江はその姉とは気が合わなかつたようである」とある。その「姉」とは、田中正二とおけいとの間に生まれた蘆江とは腹違いの姉むらで、夫は森田栄吉といつた。

「年譜」には、「六月一日付けで『都新聞』に入社、月給二十五円。これよりまもなく「明星」への投稿を介して、與謝野鉄幹、晶子夫妻に私淑」とあるが、「明星」との関係については、すでに明治三十四年の条に詳しく記しておいたように、その年代の事実であるので、こここの「年譜」の記述は誤まりである。

「孫たちへ」に書かれたこの時期の記述を記しておく。「これといふ仕事もなく、併し、だれに泣言もいはず辛抱をかさねつつも壮太郎は文学を忘れなかつた。どこに発表するあてもないのに小説を書き、俳句をつくりしてゐる中、満洲日報の社長来原慶助（マユ）といふ人に文才を認められる時が来、はじめて文筆によつて生活する道がついた、明治四十年六月来原によびかへされて東京都新聞に入社することが出来た、落合ゆきを妻として牛込谷町にささやかな家が出来た。／牛込谷町のはじめての泊り客は長崎の姉おむらであつた、そしておむらの骨折りで神戸に住んでゐる実母おしなを探し出すことが出来、二十四年目で壮太郎は母おしなと実姉おつて、実妹おすがにめぐりあふことが出来た、おてつは神戸三宮の劇場につとめてゐる堂本といふ人の妻となつて居り、おすがは大阪新聞につとめてゐる都賀兵輔の妻になつて居つた、母おしなは総山末吉（カサヤマ）といふ人と結婚して大黒座といふ劇場の中売りなどとして貧しくくらしつてゐた」。

私の父清郎もいちおう文筆で身を立てようとした人間ではあったが、意欲ばかりが先立って、終生を棒にふった男であった。その清郎が蘆江伝をつづろうとして書き残した「着流し新聞記者」という未定稿がある。原稿には「昭和壬子師走」とあるので、昭和四十六年十二月以前に書かれたものである。

「未定稿」には、次のように書かれている。蘆江は明治四十年六月一日付で都新聞に二十五歳で入社した。そして、社会部関係の雑報取材を受けもたされた。一年おくれで入社した長谷川伸次郎（のちの伸）と馬が合い、特種漁りの探訪記者となった。大正にはいつてから間もなく、花柳演芸担当記者となり、長谷川伸の方は花柳演芸欄の編輯整理（今でいうデスク）となった。その頃までは袴をつけて出社していたが、それ以後は着流しで出社するようになる。男の着物姿がめつきり減つたのは関東大震災以後のことである。震災の実状を大阪の演芸関係者に伝えるために、先代の神田伯山とともに、蘆江は都新聞社の法衣腹掛股引に手甲脚絆草鞋掛で出かけた。

着流し姿での出社、しかも午後四時でないと出社しないというルールだが、都新聞社長福田英助の気にさわった。蘆江としては、芝居関係の人々に逢うには、そうしたラフな恰好の方がふさわしいし、また、午後の時間帯の方が出社しやすい等々、それなりの理由があったようである。

大正十一年に富久町に移るまでは、牛込区余丁町三番地の借家住いだった。富久町の住所は、東京市牛込区市ヶ谷富久町百十三番地

十一号である。余丁町時代から、蘆江の家には、朝から晩まで、役者や芸人、新橋赤坂柳橋の一流どころから四谷牛込麻布といった二流どころの名妓といわれた芸者衆までが、引きも切らずに訪れて、さまざまな相談ごとをもちかけていた。中村芝鶴、坂東秀調、水谷八重子、片岡仁左衛門、中村勘三郎、杵屋六左衛門、常磐津千登太夫、小唄勝太郎、市丸、本木寿以などの若い頃の姿を清郎が知っているのは、そうした蘆江の生活のあり方からであった。

蘆江が都新聞社長との関係を修復できなくなり、自ら辞職を宣言しに行つたとき、社長の方へは一言の挨拶もせず、社長に背を向けて別れの辞を述べ、さつきと帰って来た。退社後、読売の正力松太郎社長から艶物種の執筆をせがまれて蘆江は承知し、「花柳にせ物語」を約八年間担当することになった。この費用は月々八十円で最後まで変らなかつた。

蘆江より数年早く都新聞社を退き客員となつていた長谷川伸が、これでは恩を仇で返すようではないかと蘆江をなじつた。そのことと、第二次『大衆文芸』を発刊するとき、一言も伸に相談をしなかつたこと、その二つのことが讖をなして二人は離反したのである。長谷川伸の蘆江への弔辞は二十五分にも及び、死屍に鞭打つほどの烈しいものであった。

明治四十一年（一九〇八）

二十七歳

十二月十二日？ 「六畳二間」（『都新聞』？）

明治四十二年（一九〇九）

二十八歳

八月二十六日〜十一月二十二日 「春次おぼえ帳」(『都新聞』?)  
明治四十三年(一九一〇) 二十九歳

「年譜」に、「落合ゆきの妹かぎとの間に男子出生、清郎と命名。この不始末、終生ゆきへの負目となる」とある。ゆきは、この夫の不始末を表沙汰にしたくなかったので、自らの故郷である三重県香取の在で出産したように偽装して清郎を連れ帰った。

明治四十四年(一九一一) 三十歳

和綴じの冊子に毛筆で記された『坊の日記』というものが残されていた。この年の一月一日から三月十三日までの、ほぼ毎日の清郎の成長を記している。坊(清郎)は、蘆江の書齋の身近かな位置に寝かされていたらしく、しばしば蘆江が手づからおじやなどを食べさせている。この時期の乳幼児には到底消化できないような食物まで食させて、坊が吐いたりしている記述がある。そうした無茶な育て方ではあるものの、全体としては愛情の籠もった筆致である。

二月 『春次おぼえ帳』(隆文館)

五月二十日 「平山蘆江「春次おぼえ帳」など」(『読売新聞』新刊書籍と雑誌欄)

十一月 『小説 浪の上』(柳城書院)

明治四十五年・大正元年(一九一二) 三十一歳

二月 「素人と黒人との身嗜み」(『婦人画報』)

大正二年(一九一三) 三十二歳

五月 『理想的さしむかひ』(武田博盛堂) \*伊藤みはると共著。

六月 合作「橋場の仇夢」(『講談倶楽部』臨増号) 山野芋作(長谷川伸)―平山蘆江―信田葛葉―伊藤みはる―寺沢琴風

大正三年(一九一四) 三十三歳

牛込区余丁町三番地に移る。六畳、四畳半、二畳の玄関の三間であった。

大正四年(一九一五) 三十四歳

十一月 「兇族大米おとよりのうん龍雲」(『講談倶楽部』) \*犯罪実話。殺人六件、強盗強姦三十六件。

大正五年(一九一六) 三十五歳

四月 「支那兵暴動」(『講談倶楽部』)

大正六年(一九一七) 三十六歳

「年譜」に、「養父から勘当をゆるされ、ゆきと清郎をようやく平山籍に入籍。この頃から長谷川伸二郎(後の伸、当時芋作と号す)と組み、「都新聞」の花柳演芸欄を担当。都々逸作歌並びに春日とよと組んでの小唄作詞に秀作を遣した」とある。

一月 『まじなひとえんぎ』(藤間山陽社) \*「私は御幣かつぎです」と冒頭に宣言しているように、今日となつては非科学的な書物とは言えるが、岐阜一の宮で実際に起きた幻覚の話には、ぞつとすするような現実味がある。蘆江には怪談の名手と言われるような面もあるが、その怪談の原点がこの本にあるような気がする。

十月 「不動の源次」(『面白倶楽部』秋季増刊号)

「年譜」に、「人情倶楽部」連載の『今様源氏抄』『煩惱道中記』

を刊行」とある。この『今様源氏抄』は、のちに『東京四季』と改題して岡倉書房から刊行。

大正七年（一九一八）

三十七歳

一月 「鉄舟と浅利又七郎」（『面白倶楽部』）

三月 「西郷の盟」（『面白倶楽部』）

大正八年（一九一九）

三十八歳

六月 「都市を背景とする職業女の解剖―女タイプピストと女美顔術士」（『新小説』）

大正九年（一九二〇）

三十九歳

九月 「大店頭より見たる近代型紳士」（『新小説』）

十一月 「女形の着こなし」（『新小説』）

大正十一年（一九二二）

四十一歳

この年、牛込区市ヶ谷富久町一―三番地十一号に転居。

六月 「雪の夜の襦袢」（『講談倶楽部』）

九月 「七人仇討」（『文芸倶楽部』）

大正十二年（一九二三）

四十二歳

八月 「内膳の火刑」（『講談倶楽部』）

八月二十四日〜九月十二日 震災をはさんだこの期間の日記が残

されている（『平山蘆江の日記』（『日本近代文学館年誌』資料探索(6)

平22・10）。ゆきの弟松三郎が被服廠から辛じて逃れて無事だったこ

と、蘆江の実母しなが十月六日に病没したので神戸に供養に行った

ことなどが記されている。

大正十三年（一九二四）

四十三歳

一月 「十字架教祖」（『苦楽』）

二月 「裸体二人女」（『講談倶楽部』）

四月 「隣の心中部屋」（『講談倶楽部』）\*怪談。

八月 「梯子段」（『講談倶楽部』）

十月 「清七坊主」（『講談倶楽部』）

十二月 「空屋の怪」（『講談倶楽部』）\*のちに「空屋さがし」と

改題。

「年譜」に、「菊池寛の推薦で「猪熊兄弟」を「新小説」に連載

とある。

大正十四年（一九二五）

四十四歳

十月 「月夜の返り討」（『講談倶楽部』秋季増刊号）

「年譜」に、「十月、白井喬二、江戸川乱歩、長谷川伸、本山荻舟、

矢田挿雲、土師清二、直木三十五、国枝史郎らと「二十一日会」を

結成。会の同人誌「大衆文芸」（第一次）を報知新聞出版部のバック

アップのもとに企画、当時「人情倶楽部」の編集長であった池内祥

三を編集長として引き抜いた」とある。

大正十五年・昭和元年（一九二六）

四十五歳

「年譜」に、「一月、「大衆文芸」（第一次）創刊。「唐人船」（天の巻）

を連載。同時に、長谷川伸とともに「街歌欄」を設け、三十六文字

歌運動を推進した」とある。なお、同じく「年譜」に、「村松梢風の

個人雑誌「騒人」に「熊本籠城」を連載」とあるが、これはのちに

記すように、昭和二年以降の事実なので誤まり。

一月～二月 「第二の世界」(『文芸倶楽部』)

一月 「唐人船」(第一回「隣同士」(1)～(5)「ひとりごと」(『大衆文芸』)

衆文芸』)

二月 「唐人船」(第二回「日清戦争」(1)～(7)「今年の芝居」(『大衆文芸』)

衆文芸』)

三月 「唐人船」(第三回「猶太の狗」(1)～(6)「新聞の裏」(『大衆文芸』)

衆文芸』)

四月 「唐人船」(第四回「魂迎え」(1)～(5)「話相手」(『大衆文芸』)

芸』)

四月十八日～十二月十二日 連載「西南戦争」(『週刊朝日』)

五月 「唐人船」(第五回「観世音像」(1)～(9)「間」(『大衆文芸』)

五月 「芝居漫談」(一)「顔」(『婦人画報』)

六月 「唐人船」(第七回「何阿玉」(1)～(9)「思ひ出すまま」「色即是空」(『大衆文芸』)

即空』)

七月 「芝居漫談」(三)「眉毛」(『婦人画報』)

八月 「唐人船」(第八回「坂の天神」(のちに「美しき母」と変更) (1)～(7)「屁理屈」「平穩無事」(『大衆文芸』)

更』)

八月 「大衆作家の観た通俗小説―はがき評論―」\*江戸川乱歩、

直木三十五、長谷川伸らとともに。

九月 「唐人船」(第九回「日見峠」(1)～(5)「発表禁止」(『大衆

文芸』)

九月 「芝居漫談」(四)「頭と額」(『婦人画報』)

九月 『西南戦争』(至玄社) \*冒頭に「西南戦争と大西郷」。

十月 「唐人船」(第十回「小銭買い」(1)～(4)「佐世保行」(1)～(4)

(『大衆文芸』)

十月 「唐人船」(天の巻)(至玄社)

十月 「椿説大根斬」(『講談倶楽部』秋季増刊号)

十月 「都媛の下の十有五年」(『大正之新聞』)

十一月 『唐獅子の眼』(至玄社) \*短編集。その内容―「唐獅子

の眼」「武内大臣」「生残つた男」「物干合戦」「温泉小景」「吉良上野

の首」「火の見往生」「金」「猪熊兄弟」「声」「仕返し」「仲の町辻斬

」「金札発行」。

十一月 「芝居漫談」(五)「衣装」(『婦人画報』)

十一月 「河内山宗俊」(脚本)(『大衆文芸』)

十二月 「赤穂不義土」(脚本)「屁の話」「長谷川君と私」「由良

之助と語る」(『大衆文芸』)

十二月 「四角関係」(『不同調』)

十二月 『西南戦争』後篇(至玄社)

(ひらやまじょうじ 本学名誉教授)

付記・本年譜は平山城児先生の手書きの原稿を、博士課程修了者の

石橋剛氏に依頼して、ワープロ原稿化のうえ版下を作成してもらった

ものである(藤井淑慎)。